

地方分権化と民主的選挙が生み出す「ビッグマン」

東部スマトラに暮らすアキットの共同体における村落長選挙の事例を通して

大澤隆将（総合地球環境学研究所）

本発表は、スマトラ島の東岸部に暮らすアキットの共同体における村落長選挙の過程を分析することをおして、開放性と流動性で特徴づけられる社会の中に権力の偏在が新たに現出していることを指摘し、その権力のあり方について検討を行うものである。

1998年のスハルト政権の崩壊にともない、それまで中央集権的な体制を敷いてきたインドネシア政府は、地方の権限を強化する方向に大きく舵を切り、1999年以降、数多くの関連法案が整備された。特に行政村落レベルでは、2012年に制定された新村落法の中で、各村落に分配される村落基金を大幅に増加させることが定められた。また、村落内の不平等や地域格差を是正する目的で行政村落の分割が進められており、2014年にリアウ州ベンカリス県では53の村が新設された。

本研究の舞台であるベンカリス県のT村の人口は4,197人(2017年)、面積は約250 km²である。住民の9割は、この地域の「先住民」と認識されているアキットおよびアキットと華人の混血であるプラナカンである。1971年から2012年まで、アキットのA氏が村落長の役割を担い、村落行政が行われていた。1981年から村落長選挙が導入され、2012年の改選時に彼が定年を迎えると、A氏の意向に造反して立候補した長男のK氏が、A氏が支持する次男のS氏を破り、当選した。2018年は6年任期の区切りにあたり、10月にK氏を含む3名の候補者による村落長選挙が行われた。

選挙期間中、表立った政策議論や支持集めはほとんど行われなかった。しかし裏では、反K氏派の人々がK氏の村政に激しい批判の声を挙げていた。例えば、2012年以降、村落基金の年度予算が暫時2倍以上に増大していたが、その資金をK氏は役場スタッフの増員や給料の引き上げに大きく使っていた。村落の主要道路の維持・整備を怠り村民の通行・運送に支障が出ている一方、村落の経済発展に寄与しない無用な建築物に多くの資金を使い、資金の使途も不明瞭であるとの事であった。更に、本来は住民主体で決定されるべき村議会や集落長のメンバーを専制的に決定し、反論するメンバーを一方的に罷免していた。前選挙でK氏を支持しなかった人々を疎外し、暴力を振るう場合があることも指摘された。しかし、これらの批判は、夜に各々の家に数人が集まり、密室の中で行われていた。これは、K氏が当選した際に、暴力を含む様々な報復を受けることが予想されるためということであった。

一方、反K氏派以外の人々の声も大きくはなかった。何らかの行政上の役職を持つ人々は、自らの役職を盾

に支持者を明らかにすることを拒否した。また、その他勢の人々は、「人柄を見て決める」としながらも、各候補者の人柄を論じることは慎重に避けていた。選挙結果は、K氏が7割近くを得票する圧勝であった。選挙後、K氏を支持した多くの人々が口を開いてくれた。特に強調されていたのは、K氏の援助を惜しまない人柄である。病人が発生した際、彼はその家を見舞い、自腹で必要な薬代を肩代わりし、必要なら都市の病院に入院させる手続きをとっていた。また、村内政策については、トタン屋根や苗木の援助が高く評価されていた。一方、A氏を支持しなかった人々は報復に戦々恐々としていた。

K氏が大勝した理由は、第一に、増大した村落基金にある。村落基金の増加は、彼に村民に対するより大きな援助を可能とし、それは彼の人柄と結び付けられることで名声が高められていた。第二に、批判者の不足である。2014年にT村は3つの村に分割されており、特に村政に対し不満を抱いていた周縁部の人々は新村に組み込まれていた。第三に、権力者に対する恐怖が挙げられる。村落分割の中で、「顔の見える」範囲で行われるようになった選挙は、当選者による信賞必罰を浮き彫りにし、既存の権力者へとより票が流れる。結果として、分権化と民主主義的な選挙を通じて、逆説的に、専制的な権力者が生み出されている、ということが言える。

分権化による専制的権力の発生は目新しい議論ではない。松井(2009)は分権化の結果、州・県レベルの首長が「王」として振舞うようになったことを指摘した。T村の事例は、系譜的な権威によらず、支持者との互酬性に基づき、人柄が認められているという点で、「ビッグマン」に近い。但し、このビッグマンは、国家組織を背景に持ち、また「寛大さ」よりは「恐怖」を権威の基礎としている点で、ポリネシアのそれとは異なる。アキットの人々は歴史的に国家の周縁部で暮らしてきた歴史を持ち、私が2006年に行った長期調査の際には「開放的な集団(‘Open aggregation’)」(Gibson and Sillander 2011)としての社会関係の特徴としていた。すなわち、流動的・開放的な社会関係で、ビッグマンと呼べるような社会的権威は存在していなかった。しかし、権限の強まった村落長の選挙が「顔の見える」範囲で行われる中で、当該社会に新たな権力のあり方が生み出されている。

(参考文献)

松井和久(2009)「インドネシアの民主化過程と地域開発政策への影響」『地域の振興』578: アジア経済研究所。
Gibson, T. & Sillander K. (eds.) (2011) *Anarchic Solidarity*. Yale Southeast Asia Studies.

キーワード 選挙、地方分権化、Open Aggregation、ビッグマン、インドネシア